

コラム41：戦後歌謡

(2015.5.16)

「歌は世につれ、世は歌につれ」などという言葉がありますが、その時代にヒットした歌には、その時代に生きていた人たちの心が反映していると思います。戦時のように、国家が国民の「戦意高揚」を意図して歌を創るような時代は例外として、「流行歌」(はやりうた)というのは、多くの民衆の心をとらえ、共感を得ることなしに、残っていることはありません。それゆえ、創る側の製作者、作詞家、作曲家が、いかに「すばらしい歌」を創り上げ、どんなに大々的に広報活動をしようと、世に受け入れられず、消え去っていった歌は、数知れずある筈です。

通販で「青春歌年鑑」と称するCDを最近買い込み、イチゴの出荷作業中や配達的車の中で聞いています。昭和21年から昭和34年までを12枚に収め、全240曲、かなりのボリュームです。いわゆる「懐メロ」と称される歌ばかりなのですが、昭和24年生まれの私にとって、終戦後まもなくの「流行歌」(はやりうた)というのは、「懐かしい」というのとは少し違います。70年前にタイムスリップして、そこで呼吸しているような、どこか新鮮な高揚感を覚えるのです。

歌というのは、その時代に生きている人たちの心をなぐさめ、元気にし、生きる力を与えてくれるものかもしれません。それゆえ、その時代に生きている人の心に響き、現在に至るまで残っている歌というのは、文学や映画や演劇などと同様に、もしかしたらそれ以上に、時代に生きた人間たちの心を、伝えていると言えるのです。私なりの独断と偏見による、「体感的歌謡論」を試みてみたいと思います。



「一億人の昭和史 日本占領 2」(毎日新聞刊)
より

「昭和20年10月の広島市内

路面電車の早期復旧は市民を勇気づけた」
とある。

文字通り廃墟となって人もまばらな街に、電車だけが走っているというのも異様な風景です。

昭和20年8月15日の終戦(正確には敗戦)、その日から日本は「戦後」という時代になります。米国(連合軍)により、多くの兵と市民が殺され、全国の都市は、無差別爆撃により焼き払われ、住む家もなく、食べる物もない所から出発したわけです。私は(幸運にも?)戦後4年経ってこの世に生まれたために、書物や映像や父母などの話から、その時代を想像するしかありません。



「アルバム戦後25年」(朝日新聞社刊)

「昭和22年 東京・新宿伊勢丹裏 典型的な耐乏生活
の 一コマ」

とある。ある家族の入浴風景、戦後の日本人はこんな生活から出発したのですね。

占領、焦土、食料の絶望的不足、失業、闇市等々……日本と日本人が、すさまじく惨めで苦し
かった時代である反面、戦時下の厳しい国家の規制から自由になり、明るい時代がいつか来る
ことを信じて懸命に生きていた、日本の「青春期」でもあるかもしれません。そして、そのような終
戦直後の混乱期に流行った歌のキーワードは、「リンゴ」と「強い女」と「東京」ではないか、と思
いました。

「リンゴの歌」これは昭和 20 年の十月、GHQ検閲第一号映画として封切られた松竹映画「そよ
かぜ」の主題歌であると、「日本流行歌史」(注1)に記してあります。この歌はほとんどの日本人が
一度は聞いたことがあるのではないかと、思います。TVなどで戦後の古い映像を映す時に必ずと
言っているほど、バックに流れていますから。

♪～赤いリンゴに 口びるよせて だまってみている 青い空
リンゴはなんにも いわないけれど リンゴの気持ちは よくわかる
リンゴ可愛や 可愛やリンゴ～♪

映画の中で並木路子が歌い大流行となったこの歌は、「歌謡曲ベスト
1000 の研究」(注2)によれば、有名ではあってもあまり大衆に愛されて
いないとあります。敗戦直後の焼け跡に生きる人たちの飢餓感と、この
歌の持つ行進曲のような明るいリズムは、マスコミが国民を鼓舞するに
はよくても、厳しい飢餓の中で喘いでいる大衆には相容れないものが
あったのかもしれません。「だまってみている青い顔」とか「リンゴ高い
よ」などという替え歌も現れ、手軽に「リンゴ」を食べることが出来る時代ではなく、焼け跡闇市でやっ
とその日を生きている大衆との、生活感のズレがあったということでしょうか。



わたしは学生時代に、並木路子の生のステージを偶然見る機会がありました。渋谷駅ハチコー
側出口の、現在のスクランブル交差点の正面にあったビルの7階、そこにショーキャバレーがあり、
そこで私は短期間のバイトをしていたのです。私の記憶が正しければ、1974 年の年末のことだっ
たと思います。赤坂の店に勤める(コラム27:赤坂の夜 参照)前年のことです。

年の瀬とあって忘年会の後の酔客で満席の店内、中央の小さな丸いステージにたった「太った
オバサン」はこの歌を懸命に歌っていました。しかし、その歌声は、男と女たちの喧騒にかき消され
てほとんど聞こえず、客の誰一人として聞いていなかったのです。戦後 24 年、四半世紀を経て、
急速な経済成長を遂げた日本、そしてその時代に生きる日本人には、この歌はお呼びでなかった
ということでしょう。サトウ・ハチローの作詞も美しく、マスコミは戦後の日本の復興の象徴として流し
続け、それゆえに大衆の反発を買うことになる。そういう意味では不幸な運命をたどった歌と言える
かもしれません。

「星の流れに」昭和 22 年 12 月、巷に流れたこの歌は、この時代に生きた「女の生きざま」を見
事に表現したものと言えます。これは「愛された歌」というより、敗戦直後の日本人の無残な現実を
表現した「社会告発の歌」として、人々の記憶に残っていると言っているでしょう。これは「パンパ
ン」の話です。「パンパンって何？」という人もいるでしょう。それほど現在では「死語」となっていま
す。しかし、この単語は、物心がついた頃に戦後を生きた人たちは、みんな知っている言葉なので
す。私が中学生の時の授業中に、教師から何気ないタイミングで「この単語」が発せられました。そ
して、私はなんとなくその意味を理解したのです。思春期の少年の誰もが持っている「性的嗅覚」
というやつですかね。



♪～星の流れに 身を占って 何処をねぐらの 今日の宿
荒む心で いるのじゃないが 泣けて涙も 涸れ果てた
こんな女に誰がした～♪

戦争により、何もかもすべて失った女が、最後に残された自分の肉体を商品として街頭に立つ。それが「パンパン」なのです。この歌を作詞した 清水みのる は、新聞に載った22歳の引き揚げ女性の転落の過程が書かれた投書を読んで、衝撃を覚え徹夜で書き上げたようです。NHKのラジオ街頭録音に登場する「パンパン」も現れ、誰もが彼女たちの存在を知ることになるのです。

敗戦後の日本の都会の闇の中に発生した街娼「パンパン」、その語源は戦時下の南方戦線で、日本兵が現地の女性に「性的サービス」を要求する際に「パンパン」と手を叩いて呼んだから、という説があります。(注3) 普通の素人女性がどうしてそんなをするのか？その答えは歌詞の中にあります。一番には今夜の「ねぐら」がないとあり、二番の歌詞には「人は見返る わが身はほそる」と辛い胸の内を述べ、三番には「飢えて今ごろ 妹はどこに 一目逢いたい お母さん」と、戦災で親兄弟を失っている境遇が語られているのです。

戦後に「パンパン」と呼ばれた女たちの「路上売春」は、自分が生きていくための必死の行為であり、現今の小遣い稼ぎの「援助交際」などとは、根底から違うものであると言えます。歌詞の最後のフレーズに三度使われている、「こんな女に 誰がした」は、勝手に戦争を始めた国家と、敗北して帰ってきた男たちに対して、喉元に刀を突きつけるような言葉です。この頃から、日本の女たちは力強く「変身」していったのです。

ここに一枚のスゴイ写真があります。私の所有している多くの写真資料の中の「パンパン」を写した写真というのは、「遠くから」か「後ろから」かであり、正面からはっきりと顔を撮ったものは皆無でした。しかし、この写真は全く違います。サングラスをしているものの、しっかりと撮影者を見えています。「にらんでいる」と言った方がいいかもしれません。自分をこんな生活に追いやった国家への憎悪、敗北した男達への侮蔑、自分たちを蔑む者たちへの怒り、自分自身への嫌悪、そのような彼女の感情のすべてが、この写真に込められているようです。

週刊誌からの切抜きファイルであるゆえ、出所は不明ですが記事内容から推察すると、20年前のもののようにです。「敗戦から50年 流行の戦後史」という企画の'40年代の冒頭の写真です。このような説明文が付記してあります。

有楽町ガード下のパンパンガール。大学初任給が1000円に満たなかった当時、月5万円を稼ぎ出す街娼もいたという。'46年、その数は4万人に膨れ上がり、この年、内務省より公娼廃止が通達された。

、



ライオンのごときモヒカンヘア、彫の深いマスク、タバコをつまむ指先……あまりにリアルで、さまになり過ぎているゆえ、「ヤラセ」や「取引」を疑いたくなりますが、「撮影 吉田潤」という名前は記してあります。これが街頭で偶然撮られたものなら、このあと撮影者は何事もなく帰れたのでしょうか？シャッターを押して、足早に立ち去ろうとすると、背中から鋭い声。「ちょっとニイサン！アンタ、このまま帰れると思ってんの！」……当然考えられる状況です。怖いですねえ。これから後の時代になって、この女(ひと)がどんな人生を生きたのか(あるいは生きているのか)、気になる所ですが、意外に平凡で普通の生活に入った人が多いのではないかと思いますね。

「戦後に女が強くなったというが、強うならんと生きて行けんかったということもあるよのう。はいじゃが、女はもともと、男より強いんじゃないかのう」

(注1)「日本流行歌史」(社会思想社刊)昭和45年発行

学生時代に買い求めた古い資料本です。4名の共著となっており、4センチもの厚さの豊富な内容となっています。今回のコラムを書くにあたって、歴史編や年表、歌詞などの転載に使用しました。

(注2)「歌謡曲ベスト1000の研究」(TBSブリタニカ刊)鈴木明著 1981年発行

(注3)「昭和の大衆娯楽 性の文化史と戦後日本人」(イーストプレス刊)2014年発行

◎その他下記の文献を資料として使用しました

・「歌の昭和史」(時事通信社刊)加太こうじ著 1975年発行

・「昭和歌謡」(オークラ出版刊)2007年発行

・「一億人の昭和史 敗戦・空襲・引揚」(毎日新聞社刊)1975年発行

・「新日本 原点の記録」(毎日新聞社刊)1970年発行

◎今回は敗戦直後の歌謡曲について書きましたが、あまりに長文となったため、途中で区切りをつけ、後半は次回「戦後歌謡 2」に載せたいと思います。